ルーマン社会学における「理念」の問題

――機能分化との一致とずれ――

神戸大学国際文化学研究科　畠中茉莉子

1　目的

この報告の目的は、ニクラス・ルーマン(1927-1998)の社会学において「理念」というものがいかなるものとして観察されているかを明らかにすることである。彼の用いる「意味」の概念は、彼の扱うシステム理論に沿うため、非実体化、形式化、偶発性化されたものであり、「理念」や「精神」という旧来の言葉は徹底して払拭しようとしたものであったと言える。ところが彼はそれにも関わらず、「理念」として語られてきたものを完全に廃棄するのではなく、自身の社会学の枠組みに合うよう変換しようとする。その理由は何だったのか。今回はとりわけ彼による「理念」の位置づけに関する試行錯誤を、彼が描く社会の「機能分化」との関係において捉えることにより、彼の扱った「意味」概念の持つ幅の、ある側面を明らかにすることを試みる。

2　方法

ルーマンには「理念」の問題を扱った一連の業績がある。とりわけ集中的に理論的な議論が行われたのは 1980 年代の初頭であると言えようが、本報告ではこの時期の論考をむしろ彼の中の「問題設定」の段階と捉え、その後の理論的展開がどのような方向を示したかを検討することを主眼とする。中でも注目されるのは、法、政治、経済、科学、教育、芸術、宗教といった社会の機能領域とされるものが、「理念」とどのような関係にあるかという、「理念」と「機能分化」をめぐる問題である。今回はそのうちのとりわけ法と宗教が話の前提となるが、その理由は、この二つの領域が、ルーマンにおいては「理念」の高度な彫琢という点では類似していると同時に、機能システムとして抱える問題はそれぞれ別様であるがゆえに、比較の観点として有効であると思われるからである。

3　結果

ルーマンにおいて描かれる「理念」は、機能領域ごとにそれぞれ異なる形態を持つものとして見出されることになる。それゆえに、機能システムの「機能」や「コード」といった観点と並んで、各機能領域の近代社会におけるあり方を検討するさいの有用な観点の候補たりうると言える。ただし「理念」は、一方では機能システムの存立を支えるはたらきを持つものとしても現れるが、他方では各領域に対し、「理念」を持つがゆえの問題を生じさせる契機ともなることが示される。宗教および法は、それぞれの「教義学」においてこうした課題と向き合うものとして描かれる。

4　結論

こうした考察は、ルーマンによる思索を通じて、近代社会における機能分化のあり方についても考えるべき問題を提示している。すなわち、何が機能システムとして分出していると言えるのか、そして機能システムは、今後どのような仕方で存続していくのかといった問いへの視点である。こうした観点は、今回取り上げた二つの領域以外にも、広く応用されうるものと考える。

文献

・Luhmann, Niklas, 1980, *Gesellschaftsstruktur und Semantik: Studien zur Wissenssoziologie der modernen Gesellschaft*, Bd.1, Frankfurt am Main: Suhrkamp.（＝2011, 徳安彰訳『社会構造とゼマンティク 1』法政大学出版局）.